

彼女は夏希先輩。
先輩はいつも下半身をむき出しにしてる。

なんでもふたなりの方は、
他の人より体温が高く、
こうして涼んでいることが多いという。

僕はふたなり先輩の性処理係



彼女は夏希先輩。

先輩はいつも下半身をむき出しにしている。

なんでもふたなりの方は、
他の人より体温が高く、
こうして涼んでいるニトが多いらつ。



男はふたなりの性処理の手伝いをする
決まりになっている。

そして僕は夏希先輩の担当だ。





「今日は体育があつたからな♥
結構汗かいたし蒸れてるぞ♥」
先輩のチンポはじっとりと湿っていて、
激臭を放っていた。

初めはこの臭いにかなり抵抗があつたけど、
それも三日くらいで慣れてしまった。

僕が先輩の前に座ると、
先輩は足を広げチンポを見せつけてくる。

僕の上半身ほどもある大きなチンポは、
ビキビキと血管を浮かせていきり立っている。




僕はいきり立ったチンポに顔を近づける。

「ほら、あたしのチンポの臭いを嗅げ！そして覚える！」

先輩のチンポに顔を押し付けられる。





僕はチンポの臭いを必死に嗅いだ。
あまりの刺激の強さに咽そうになる。
しかし、「こっつすること先輩は喜んでくれる。」

「今日は朝からずっと我慢してたんだ。
とりあえず一発出すぞ！」

僕の頬の上でチンポがビクビクと脈打ち、



ジュン

ジュンジュン

ジュン

濃厚でドロドロとした精液が噴き出した。
ポトポトと熱い液体が落ちてくる。

先輩は僕の顔に精液を擦りつける。
僕は先輩の所有物だと自覚させるかのように。

トロロ
♡



いよいよ先輩のチンポが入れられた。

「んん…んん、挿っさ…」



両腕を捕まれているが、
僕の体を支えているのは先輩の巨根だった。

地面に足が届かず、
ただチンポに体を支えられていた。



お腹に圧迫感を感じるが前立腺も刺激され、
快樂も流れ込んでくる。

「うお…いい締めりだ」



「ほらほらあ！

もつとケツ穴締め媚びる！

♡

♡

♡

♡

お腹の中に先輩の性欲をぶつけられるが、
両足を揺らすことしかできなかつた。

♡



お尻の中でチンポの脈が速くなるのを感じた。

いっしょ

パッパ

パッパ

「うっ！ 精子上ってきた！ 出すぞお！」








お尻からお腹にかけて熱さがほとばしる。
両腕を強く捕まれ、ひたすらに精液を注がれる。

射精が始まって20秒後、
精液が僕の胃袋から逆流して口から出てきた。





「ちよつと疲れたなあ 少し休むか」
先輩は僕をチンポに刺したままソファに座る。

「ぐお！」

「ははは。どうした、座った衝撃でいつちまったか？」
チンポが直腸を突いた勢いで精液が漏れ出る。」

「体重がかかって気持ちいいだろ♡♡」

腰を浮かせて少しでも快樂から逃げようとする。
しかし、チンポのヒダがズリズリと引っ掛かり、
なかなか離れられない。



「おい、何逃げようとしてんだ♡
せつかく人が休んでるっていうのに♡」

パ
ン♡

そう言いながら先輩は腰を動かしてチンポを押し付けてくる。
その度に快感が腰から背筋を伝い脳へと届く。

パ
ン♡

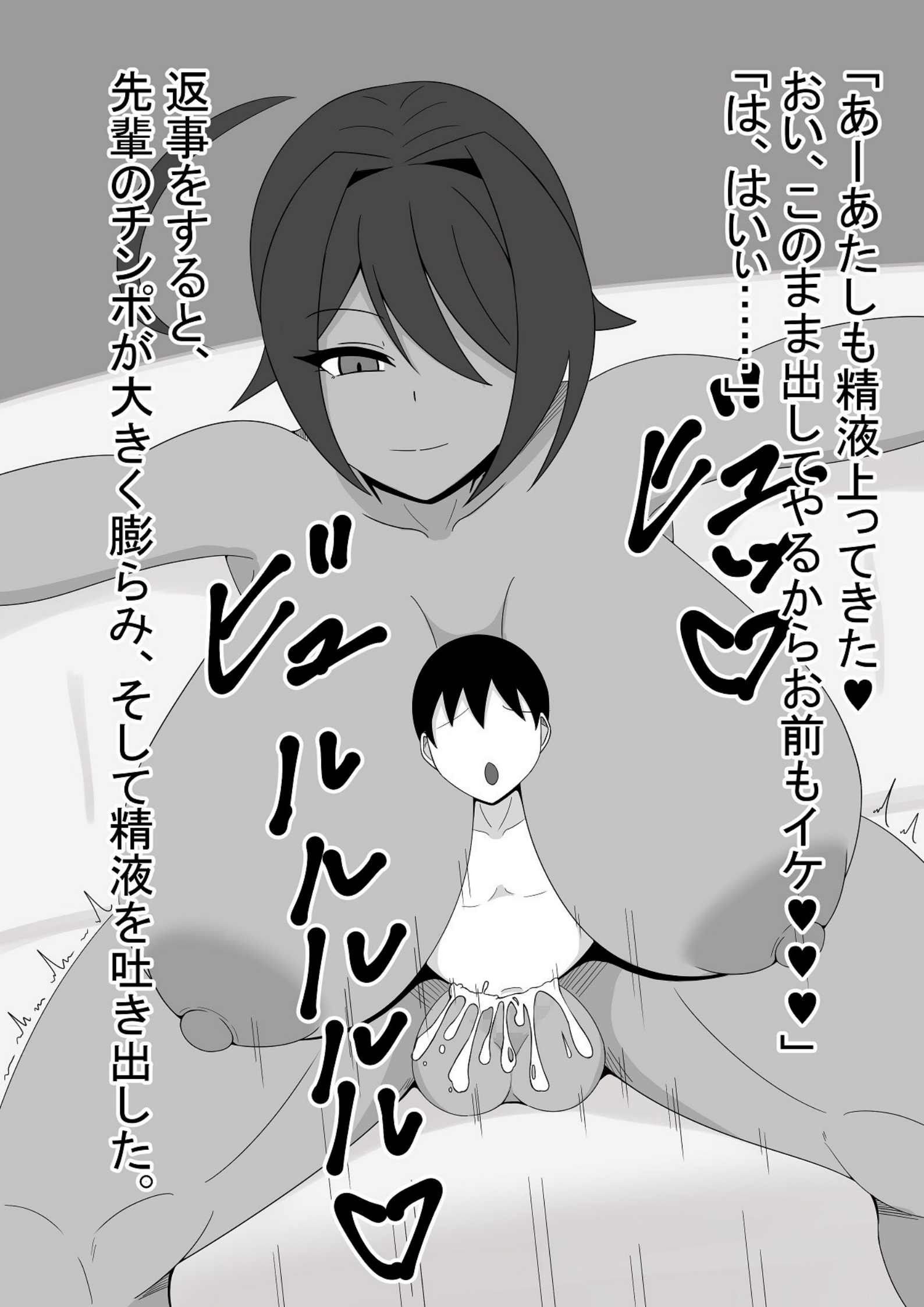


「あーあたしも精液上ってきた
おい、このまま出してやるからお前もイケ♡♡♡」
「は、はい……ポ」

ビュッ♡

ビュ
ル
ル
ル
ル
♡

返事をすると、
先輩のチンポが大きく膨らみ、そして精液を吐き出した。





「休憩のつもりだったけど、

お前のケツオナホが気持ちよくて、また出しちまったぜ♥」

先輩の射精を感じながら僕も精液を出した。



先輩に、小さな体を持ち上げられ、股を広げられる。

「まだまだ終わらないからな♡♡♡」

バキバキに勃起したチンポを見せつけられ、僕はそこから逃れようとした。しかし足を両手で固定され、逃げられない。

ぐつと頭を押さえられ、
お尻の穴にチンポがねじ込まれる様を見せられる。

「ふふふ♥ お前のケツはすっかりあたしのチンポが
気に入ったみたいだな♥♥」
先輩のチンポがあっさりとお尻に入る。

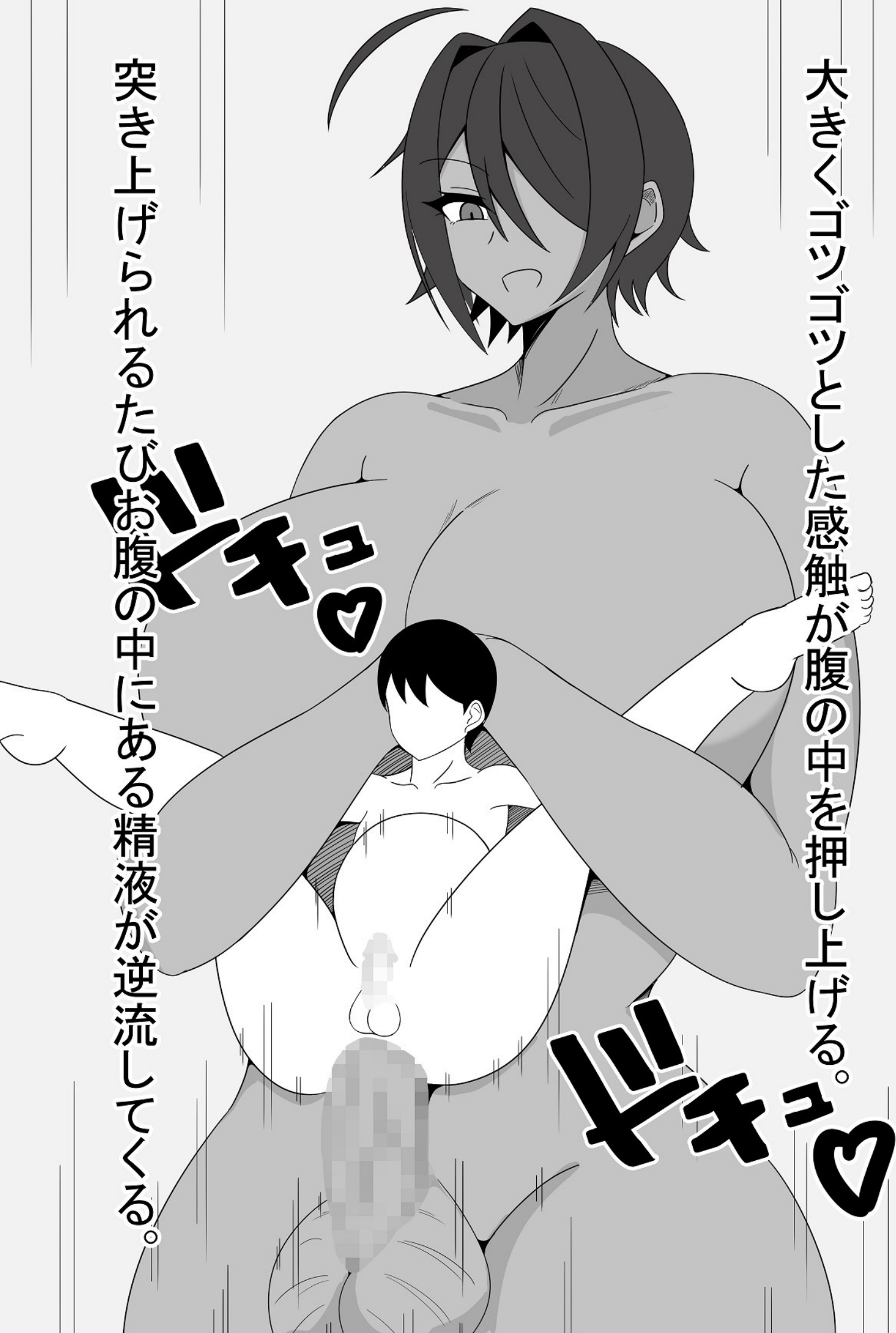


大きくゴツゴツとした感触が腹の中を押し上げる。

ゴツゴツ♡

突き上げられるたびお腹の中にある精液が逆流してくる。

ゴツゴツ♡



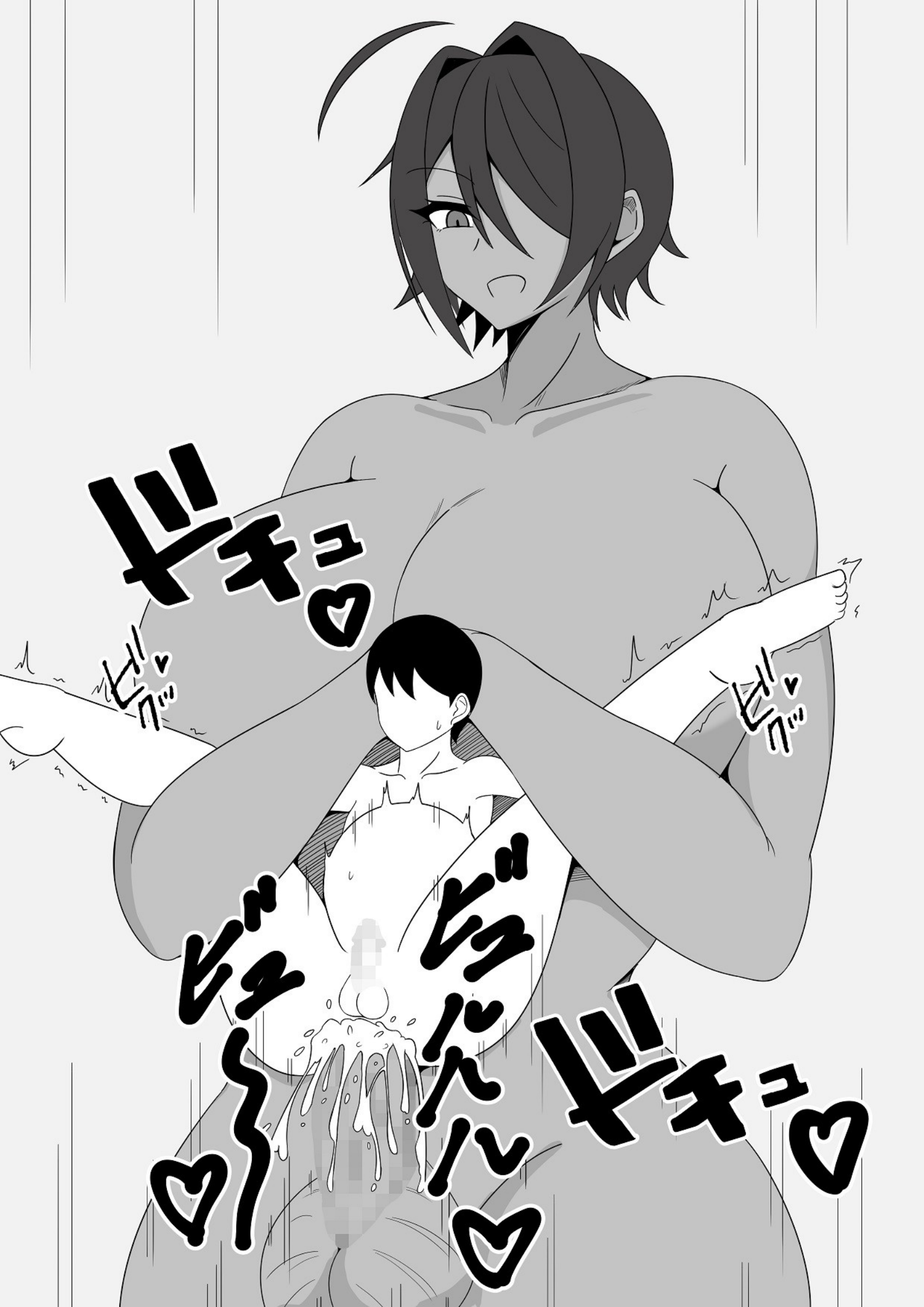
「オラッ！ どうだ！ あたしのチンポ気持ちいいだろ！」
「き、気持ちいいです！」

「よーし、それじゃあたっぷりほじってやる！
受け取れ！」



ビュッ♡

ビュッ♡



気持ちいい♡

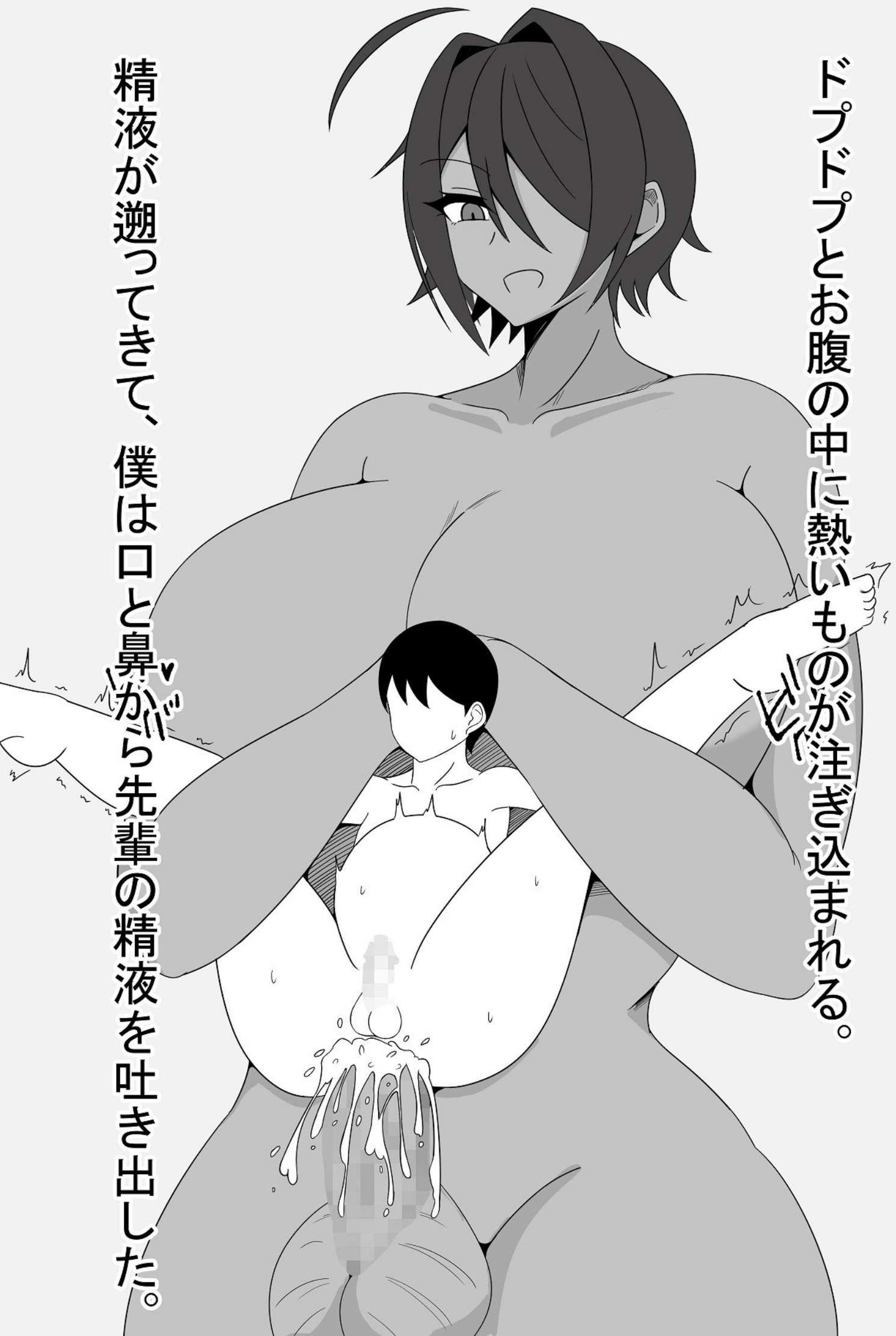
気持ちいい♡

気持ちいい♡

気持ちいい♡

ドプドプとお腹の中に熱いものが注ぎ込まれる。

精液が遡ってきて、僕は口と鼻から先輩の精液を吐き出した。



「ほら、あたしのチンポに媚びろ♡♡
種付けしてください♡♡」

仰向けになり、両足を広げて服従のポーズをとる。





「お、お願いします…。先輩の、デカイおチンポで僕にもっと種付けしてください」
「随分無様な姿だな♡♡」

大きな体が僕の上に覆いかぶさった。
ぐぐつと体重をかけられ、身動きが取れない。

先輩の鼻息と口臭が顔にかかる。
僕のケツ穴はすっかり先輩のものになり、
あっさりとしてチンポを受け入れた。

「チンポ入れられただけで気持ち良くなったのか？」

「キョ♡♡♡」

「キョ♡♡♡」

「キョ♡♡♡」

「キョ♡♡♡」

今まで以上に強い腰振りだ。
相手のことを考えない動物の交尾のように。
一突きされるごとに目の前がチ力チ力する。

ズキョ♡

しかし頭の中は快樂でふわふわしている。
「きたきたきたきたあ！ 今日一番濃い出すぞお！」
先輩の腰振りがさらに早くなりそして…

ズキョ♡

ちゅ♡

ちゅ♡



「イクウウウウウウウウウウウウ!!」
咆哮とともに大量の精液が発射された。

30秒経ってもまだ先輩は射精をしている。
僕は体も頭も真っ白になり、そのまま気を失った。















































